

座談会

『工学研究科のさらなる発展に向けた取り組み』

出席者 工学研究科長
教育研究評議委員
副研究科長・戦略支援部長
副研究科長・運営企画室長
副研究科長・キャンパス施設マネジメント室長
社会連携室長
財務室長
総務室長
コンプライアンス室長

田中 敏宏 教授
馬場口 登 教授
神戸 宣明 教授
澁谷 陽二 教授
澤木 昌典 教授
田中 敏嗣 教授
尾崎 雅則 教授
渡部 平司 教授
青木 伸一 教授

司会 環境・エネルギー工学専攻

福田 武司 教授

司会(福田) 本日はお忙しい中、大阪大学工業会の座談会にご出席頂き誠に有難うございます。毎年の恒例行事になっておりますが、4年に一度は新規に就任された研究科長とその執行部を支えておられる副研究科長や室長の先生方をお迎えして、継承された体制の運営や更なる発展に向けた取り組みについてお話し頂き、大阪大学工学部・工学研究科の現役学生や同窓の皆様にも広く発信させて頂きたいと思料しております。僭越ながら、本日の司会を担当させて頂きます環境・エネルギー工学専攻の福田でございます。工業会誌の編集委員長を務めさせて頂いております。何とぞ宜しくお願い申し上げます。



福田 武司 先生

基本的には2段階の組み立てとし、先ず最初に「今の状況」をご説明頂き、その後に「将来の形」に触れて頂けると有難く存じます。しかしながら、諸般の境界条件による制約があり、大学では深謀遠慮は報われないと云うのが皆の学習する処であります。大きな風呂敷を広げても現実味のない「お話し」になってしまいますので、近くに視点を置いて頂けますと幸いです。また、後半では異なる視点からの問題提起に繋げるべく、先生方のご担当分野の垣根を越えた議論ができればと考えております。加えて、最後に

工業会に対するご要望等をお伺いできましたら幸いです。

それでは先ず、大学の動きを踏まえた全般的なお話を田中研究科長にお伺いしたいと思います。宜しくお願いいたします。

田中(敏宏) 平成27年8月26日付で掛下先生の後任として研究科長に就任しました。新しい総長のもと、全学の執行部の組織も大幅に変わっており、全学の室体制も見直され、全部で総合企画、財務、教育、研究、グローバル、産学連携、男女参画・社会学連携、労務関係の8室になりました。



田中 敏宏 先生

工学研究科の方でも従来の執行部の室体制(運営企画、教育学務国際、社会学連携、情報・広報、総務、財務)に加えて新たな室を2つ作りました。キャンパスマネジメント室とコンプライアンス室です。さらに、工学研究科の室を取りまとめて頂く室長の先生方のうち複数の方が全学の室にも室員として参加していただいております。可能な限り全学と工学研究科の間でスムーズな運営に関するやりとりができる体制にしたいと考えました。

全体的な方針としては、工学研究科では、やはり人材育成に対して、特に長期的な視点で、重点を置きたいと考

えております。今まで博士後期課程の人材育成プログラムとして21世紀COEプログラムやグローバルCOE等の活動がありましたけれども、こう言った短期集中型の学生育成の為のプログラムに留まらず、それらのプログラムに従事した若手研究者がそれらのプログラムの場をFD(教員研修)の場としても活用し、それらの若手研究者が後々工学研究科を支える人材になるなど、個々のプログラムを継続的に活かした長期的な人材育成体制の整備に焦点を当てたいと考えています。更に先ほどお話しした執行部の8つの室体制がそれらの人材育成活動を支える環境づくりに寄与したいと考えています。

特に、国際交流関係の話としていつも例を挙げるのですが、ダブル・ディグリー・プログラムの構築というプロジェクトを昨年からはじめておまして、海外の2つの大学で2つの学位が取れるシステムを作ろうとしており、文科省もそれを推進しようという話が出てきております。

工学研究科におきましても、それを現実に構築するのは非常に難しく思われたのですが、実際には去年から立ち上げ始めると、先生方のご協力を得て比較的スムーズに、特に東南アジア系のトップクラスの大学と工学研究科、あるいは大阪大学のほかの基礎工とか理学部も含めてですけれども、協定が複数件できました。

この協定実現のキーポイントは、工学研究科の場合には、例えば生物系分野では40年以上も前から英語コースというのを始められていて、そのときの卒業生が外国で、自分の国へ帰って活躍されていて、その人たちは、教授、学部長、学長さんにもなられているところがあり、そういうところでは大阪大学の工学研究科の教育研究活動を非常に高く評価していただいていると一緒にダブル・ディグリー・プログラムも進めていこうという話になりました。それでスムーズに話が進んでいるという背景があります。40年前の人材育成への新たな取り組みが40年後に大きく実った例の一つと言えます。

それくらい長期的な観点で人材育成を進めるべきであ



ると思っています。このことは他大学の例を挙げても言えますし、大阪大学工学部でも実際にそういうことが起こっているのです、これからも若い人が将来10年も20年も先で、活躍してもらえようような人材育成の取り組みをしたいと思えます。そのためには、入試から、全学共通教育、講座制教育、大学院教育の一連の流れを通じて、社会で活躍できる基盤となる実力を身につけることができる人材育成を実施し、卒業後も母校に足を運んでくれるような人材育成のための魅力的な環境づくりが大切であると思っています。

そのためには実際に教育の現場にいる工学研究科の数百人の先生方と連携をとって、教育の現場、国際交流の場、研究活動への支援、キャンパス整備、いろいろな運営企画とか、コンプライアンス、さらには産学連携などの土台となるところを工学研究科の執行部できちっと押さえていけたらいいかなと思います。

大きな方針としては、前掛下研究科長が4年間ずっとつくってこられたところを、基本的には継承しようと思えますけれども、全学の執行部の組織も変わってしまいましたので、文科省からのいろいろな大きなプログラムとか要望とかにも適切に対応しながら、過去に築かれてきた土台をさらに発展していこうというのが基本的な方針です。

司会 では、副研究科長の神戸先生から何か補足する事項がございましたらお願いいたします。

神戸 特にありません。

司会 続いて評議員の馬場口先生に現状をお話願います。

馬場口 私もこの8月26日から評議員をさせていただいています。私の前任の片岡先生が9月末で転出されて、評議員の心得とか、そういうものを何か教えていただけたかなと思ったら、急に去って行かれたという感じで、評議員の仕事は何たるやというのは、まだよく分かっていないところが実際です。

そのときに掛下先生から、評議員は評議会にきちんと出よと第一に教えていただきました。全学の評議会というのは、大学の最高議決機関として、工学部の中でいうと専攻長会にあたります。評議会は、どちらかというと、もう決まったことをシャンシャンという、ある意味、儀式のようなところがあります。工学部にもありますが、役員会というのが全学にもあって、そちらで一生懸命いろいろ議論して、本当の大学の方向性を決めていく感じはしております。

最近、3カ月ほど評議員をやらせていただいて、いろんな室会議にも出て、いろんなことがあるなどという事は薄々感じています。コンプライアンスのこととかいろいろ問題点は多いなど。その中で、評議員の仕事の一つということで、評価のことを考える機会がありました。実は、前の評議員の片



馬場口 登 先生

岡先生が指導されていた第2期中期目標中期計画の確定評価資料の総まとめの仕事を引き継ぎました。そして、工学研究科の研究のポテンシャルやアクティビティがとても素晴らしいと感じました。特に共同研究講座という枠組みを日本で最初につくったと誇るべき実績があります。これは第2期ではないのですけれども、阪大方式として全国的にも知られています。

確定評価資料を作るときに、大学本部が、研究の質の向上がどれだけ図られたかそれを書けと、非常に難しいことをおっしゃるわけです。質の向上っていったい何なのかなと思って考えていたら、神戸先生が、科研費の第1期と第2期の獲得額の違いの表をこしらえておられて、それをベースに質を論じるかなど。大学における一番基本的な競争的資金というのは科研費です。これは疑いのないところです。ところが、科研費というのは、教員の方は誰もご存じだと思いますけれども、名前を付けて評価をするわけです。同じものを書いていても、人の名前によって通ったり通らなかったりします。名前と実力の一致が認められて通るのです。第1期のときに、工学研究科の教員1人当たりだいたい300何万円。私はこの平均の数値相当すごいなと思っていたんですけども、第2期になりますと、それが500万円を超えるのです。教授、准教授、助教全員なべて、平均で500万の科研費を獲得しているんです。科研に限らず、委託研究なども京大に負けないうくらい取ってます。本当にこんな組織あるのかなというくらいびっくりしました。教員の研究に携わる時間が10%減ったとか、いろいろ言われておりますけれども、大阪大学工学部は十分やっているよなと私は思っています。大学本部もそれを認めて、つまらない書類を多く書かせてほしくないというのが本音です。

ただ、来年度から始まる第3期に向けて、また計画などの書類などを作っていくかなくては行けません。その辺についても、大阪大学工学部のいいところを再発見するようなことになればいいなと思っています。

私も何を言っているのか分かりませんが、お許しください(笑)。僅かな期間の調査で、工学研究科は、や

はりいい研究組織であり、いい人材が集まっているなどいうことを実感しました。

司会 随時、言葉をはさんでいただいて結構です。

馬場口 また後で(笑)。

馬場口 何か言いにくいですね。

司会 この後は、室長を務めておられる先生方に順にお話をお伺いしたいと思います。まず、澁谷先生から運営企画関連のお話をお伺いします。

澁谷 8月26日に田中新研究科長になって、それ以降、副研究科長と引き続き運営企画室の室長を仰せつかっています。やるべきことは多々あるのですけれども、それらを時間軸方向に分類すると広く分散しています。短期的にやらなくては行けないことと、中長期にやらなくては行けないことに少し分けて考えていきたいと思っています。

短期的にやらなくては行けないのは、この1、2年の間に時限の来る工学研究科の附属センターを含めて見直し、次の10年ぐらいを考えたミッションを持つセンターを設立しなければ行けないということです。

中長期的には組織の再編がありますが、これは前総長が未来戦略機構という新研究科を打ち出して、工学研究科の構成員の方何人かが深く関わっておられます。その状況を見て組織再編を考えていくことになり、前掛下研究科長のときに、少し保留をするという形で今に至っています。新しい総長になって未来戦略機構が見直しになりましたので、それがどのような形になるのかを見極める必要があると思います。



澁谷 陽二 先生

一方で、平成25年から教員ポストの大学への留保計画がもう始まっています。工学研究科は450名ぐらいの教員がおられ、その1割、40強ぐら이가平成25年から35年、ちょうど10年かけて大学に留保する形になります。そうすると、工学研究科10専攻を考えると、1専攻当たり4、5人、すなわち1研究室分、いわゆる1研究領域がなくなることになります。それにともなって全体のパイが小さくなるので、面積配分の仕方、予算配分の仕方といった組織運営の根幹の部分はこの10年の間に考えなくては行けないと思います。その方針を中長期の

間に決めることとなります。

もう1つは、先ほど田中先生が言われたように人材育成です。我々は研究型大学ですので、それを担うための博士後期課程の学生をいかにエンカレッジして充実させていくかということは、近々に課せられた非常に大きな課題のように思います。それを組織的にどのように後押ししていくかということも併せて考えてきたいと思います。

司会 重たいですね。

澁谷 前半は重い話になります(笑)。

司会 ありがとうございます。4年前の座談会でお伺いした内容は、もう少し明るくて「教員の持つ役割を明確にして研究に集中できる環境を作る」と発言しておられます。

澁谷 4年前の話であり、総長も替わり取り巻く状況も随分と大きく変わってきています。

司会 続きまして、田中(敏嗣)先生、社会連携関連、よろしく願いいたします。



田中(敏嗣) はい。私は今年の5月13日から、少し変則的ですが、奈良先生の後を継いで社会連携室長に就任いたしました。

まず、私と社会連携室との関係はずいぶん以前にさかのぼりまして、初めて社会連携室の室員になったのが2006年、神戸先生が室長をされていたときでした。実はこの2006年というのは、非常に象徴的な年であり、今いろいろと話題になる共同研究講座が立ち上がったときで、ダイキン(フッ素化学)共同研究講座、マイクロ波化学共同研究講座、大阪大学コマツ共同研究講座、この3つがこの年に立ち上がりました。この10年間に、この共同研究講座が非常に発展し、その間に社会連携室の仕事も非常に大きく変わってきています。

2006年当時は、社会連携室の下で、地域連携部門、企業連携部門、情報ネットワーク部門、広報部門の4つの部門が動いていました。その後、情報ネットワーク部門と広報部門は室として独立し、残りの2つの部門が今もまだ続いて残っているところです。



田中 敏嗣 先生

この当時は、社会連携室の仕事としては、例えば、東大阪のクリエーションコアという施設に開設していたサテライトオフィスで技術相談を受け付けていたり、大阪商工会議所、尼崎市産学公ネットワーク協議会と共同でソシオ大阪と云うシーズ交流会や社会人教育講座などを開催したりする活動を実施していました。それから、企業連携部門では、この年に共同研究講座が立ち上がっていますので、その辺のところをケアするものがあつたかと思います。

それから2年間、室員を務め、その後2年を置いて、2010年に奈良先生が室長になられたときに、社会連携室に室員として戻ってきました。このときの共同研究講座の数というのが、2006年からなので4年たっていますけれども、3つから15共同研究講座に増えています。さらに、現時点では、共同研究講座の数が15、協働研究所が5つになっています。協働研究所は2011年にテクノアライアンス棟が完成したときに新しくできたものですが、それまで共同研究講座であったところが協働研究所に移行するという形のものもあり、全体として非常に大きく発展的に拡張してきたという状況になっています。

この間、神戸室長、池田室長、奈良室長と移行する下で、仕事の内容、軸足が共同研究講座・協働研究所へと移動してきて、この間に、サテライトオフィスで実施していた技術相談などは産連本部に移管するという形で、現時点では、共同研究講座・協働研究所に関する部分が一番大きな仕事となっています。

この間、共同研究講座・協働研究所が発展する過程で、歴代室長のもとでさまざまな取り組みが行われました。1つは、年2回開催している交流会です。内部の共同研究講座・協働研究所の間の交流により情報共有をするのと人的ネットワーク形成をするという形で、さらに横のつながりで活動を広げていくということです。あと、共同研究講座シンポジウムですね。これが2009年に第1回が開催されました。今年の12月2日に第8回を開催することになっています。ちょうど今年が共同研究講座の発足から10年目になりました。ということで、今年は『共同研究講座10年の歩みと

今後の展開』と題してシンポジウムを実施します。

共同研究講座シンポジウムというのは、対外的な広報の目的で実施しています。対外的な広報と、それから、これで共同研究講座の仕組みや取り組みを知っていただいて、新たに共同研究講座を始めるところを集めるという、そういう意味合いもあるかと思います。こういう取り組みを通じて非常にうまく発展してきたということですね。

それから、これらの成果に対して、一昨年12回の産学官連携功労者表彰の文部科学大臣賞を受賞し、今年の5月には奈良室長のもと、オープンイノベーション交流会と題した感謝イベントを実施しました。

この共同研究講座制度は、過去10年間で他の大学にも広がってきており、先日、社会連携室で確認してもらったところ、他に25の大学で同様の制度が導入されていることが確認されています。今でも外部の企業や大学からの見学が多く、明日も、中国の大学から見学に来られることになっており、国外からも注目されていると云うのは驚きました。ということで、非常に外から注目を浴びているということです。

この間の成果ですけれども、個々の共同研究の成果の他に、この制度で長く安定的に共同研究の仕組みを維持できたことで、例えば、学生が共同研究に参加をして、その学生が相手先企業に就職をし、その後、招へい研究員としてこのチームに参加するという事例が出てきています。その人が、現在、博士後期課程に進学しようと準備するような状況になっています。こういう状況は、やはり長期にわたって安定的にこの仕組みを維持してきた成果であると思います。それ以外にも、阪大の理学部の博士前期課程を修了し、共同研究講座に参加する企業に就職した学生が、共同研究講座に招へい研究員で来て、博士後期課程に進学する事例もあり、このような形で社会人に対する人材育成についても非常に大きな成果が出てきていますし、このような形の共同研究講座・協働研究所を活用した社会人教育は今後さらに発展することが期待できていると思っています。

そのほかに、第1期の共同研究講座で立ち上がったマイクロ波化学共同研究講座は、JST(科学技術振興機構)の大学発ベンチャー表彰2015を受賞し、さらに、OUVC(大阪大学ベンチャーキャピタル)の第1号の出資案件となるなど、イノベーションの創出といったところでも顕著な成果が生まれています。

このように、これまでの蓄積によりある程度成熟した状況ができていますから、今後はこれを土台にしてさらなる発展を目指して行くことになっていくと思っています。

前産学連携担当理事の馬場先生は共同研究講座・協働研究所を100に増やすと仰っていましたが、これは現在の産学連携担当理事の吉川理事も引き継がれており、工学研究科としても増やしていく方向で進めたいと思っています。

実は、まだ、室長になって間もないことから、個々の共同研究講座の状況というのはまだよく見えないところもあるんですが、勉強していきながら、さらに発展するように運営していきたいと思っています。以上です。

司会 精力的な取り組みを重ね、着実な進展があると云うことを伺いました。私もよく存じ上げなかったんですが、今のお話ですと、もう少し大学のランキングが上がってもいいかなという気がしますが、如何でしょうか？

田中(敏宏) イノベティブな大学として高い評価を受けています。

田中(敏嗣) そうです。トムソン・ロイターの最もイノベティブな大学の世界ランキングで、阪大が18位に入り、日本では最上位になりました。

司会 では、発信も上手く出来ているということですね。

田中(敏嗣) はい。

司会 続きまして財務関連で…。また重くなってしまいますけれども、尾崎先生。お手柔らかにお願いします。

尾崎 財務室長を仰せつかっています尾崎でございます。私は、平成17年、教授になったと同時に財務室の室員を仰せつかりました。その当時は小松先生が財務室長で、その後、片岡先生が財務室長を継がれ、片岡先生が教育研究評議員になられた後を受けて財務室長を仰せつかりました。かれこれ10年、財務を担当しております。

一方で、平成22年、これも片岡先生の後任として本部財務室の室員となりました。当時の驚田総長のときですね。その後、平野先生と今の西尾先生のもとで、かれこれ7年間本部で財務関係の仕事に従事しております。



尾崎 雅則 先生

今、田中(敏嗣)先生のすぐく



夢のあるお話を伺ったところですが、私は、どこへ行っても嫌な話ばかりするのでとても心苦しいのですが、実は私も、財務室の室員になった当時の平成17～18年頃には、耐震改修工事が始まるか始まらないかという頃だったので、いわゆる重点経費として、オーバーヘッドを有効活用して皆さんにいろいろご提案いただき使っていただく仕組みを作っておりました。使っていただくという言い方は悪いですが、そういう形で発展的に予算を使っていた時代でした。

その後、予算の多くが耐震改修に充てられるようになった後は、学生支援の仕組みを検討するワーキングで、学生をどう支援するのかとか、専攻の評価など、傾斜的にお金を配分する方法はどういうものがあるのかとか、そう云うことを考える仕事になりました。その頃はまだ前向きだったのですが、以降はだんだん世知辛くなり、財務の仕事なのか経理なのか分からなくなることもありました。

工学研究科の財務は、お金という面だけで考えると、国から大学に来たお金を、本部からまた配分を受けて、それを使うのが仕事となります。言い換えると管理するところになります。しかし、全学の財務に係わるようになってから、財務状況がすごく厳しいものとわかりました。つまり、10年間で分かったのは、当たり前のことですが、何事をするにもお金が必要だということです。それと、お金に関わることとなると皆さん目の色が変わるということを実感しました。

財務の仕事をしていると、予算が不足した時などに、皆さんから、「使い方が悪いのではないかと」とか、「無駄なものに使っているのではないかと」とか、よく言われます。大阪大学の全予算規模は1,300～1,400億です。でも、その中の850億は、概算要求、受託研究、病院収入などの右から左に出て行く目的の明確なお金です。従って、大学の運営資金というのは500億強になります。500億の中で人件費が360億くらいになりますが、国から来る一般運営費は同じく380億程度。ですから、国から来るお金も、また右から左に人件費に消える。あとは学納金で授業料130億。

そう詰めていきますと、実際、我々が大学運営で使うお金は、それこそネットワークの整備から郵便代、電気代全部含めて、150億ぐらいで動いているのです。それを各部局に分けていく訳ですが、そうしますと、本当にぎりぎりのところで工面しています。逆に、使う現場でまだ無駄がないのかなと思ってしまいます。

そのような状況の中で、これまた本当に暗い話なのですが、来年の運営費が5億円減ります。さらに、人事院勧告と社会保険料の問題で4億円減るので、合計9億円の予算が実質減ることになります。それから、情報設備の更新費が4億円掛かりますので、結局13億円。そうすると、1年の150億円の予算のうちの13億円が減るという勘定になっています。

これは今年だけではなくて、おそらく来年以降も数億円、3%くらいずつ予算が減っていく状況です。でも、よく考えて見ると、日本の国を見ても全然楽観的ではないことが分かります。こんな赤字でやっている国がよく動いているなど思っています。最近、文科省のホームページを見るよりも財務省のホームページを見て、財政制度等審議会とかそういうところの議事録を読んだりするのは（笑）。そうしますと、「社会保障切っているのだから教育だけ特別扱いできないだろう。なるほどな」とか思ったりもして、先日そんなことを人に言ったら、「大学の中でそんなこと言っちゃ駄目ですよ」と言われました（笑）。

そのように、確かに大学は本当に厳しい状況の中にあると言えます。一方で、産業競争力会議とか財務省とかが「大学は変われ」と言います。外から見ると目というのも確かに当たっているところもあるなど思っています。

では、予算が減ってくる中でどのようにやっていくかということが重要で、これから益々特定研究大学と云った考え方が重視されると思います。特定研究大学というのは、要は、「自由にやっていいですよ。でもお金はあげません」という制度ですから、結局お金が無くなるだけの話です。その中でアメリカの大学のように自立するために、先ほどの産学連携のお金であるとか、寄付金である基金が重要になると思います。海外の大学ですと、どんな州立大学でも数十億から数百億円くらいの基金を持っています。大阪大学も、未来基金として寄付を集めていますが、年間2億とか3億しか入ってきません。だから、そういったものをもっと活用して新しいことをやっていくためにも、これから大学が大きく変わる必要があります。ただ単に「お金が来ない、来ない」と言っているだけじゃなくて、どうすべきかよく考えることが重要だと思っています。

このような状況で、工学研究科というのはやはりすごい

と思います。私も、いろんな部局の話聞いておりますが、医学研究科と工学研究科は突出しています。よく掛下先生も、工学研究科は、使うのも稼ぐのも、大学全体の4分の1だと言われていましたが、お金を稼ぐことに関してはそれ以上ですね。やはり、今後規制が緩和されてどうなっていくのか全く見えませんが、このすごいポテンシャルをどう生かして、工学研究科が自立していけるのかということが、これからの課題です。本来であれば、そう云うことをもっと議論しなければいけないのですが、冒頭に申し上げたように、財務室が最近では経理室になっている有様です。ただ現状はそうなのですが、少し将来を見据えて、役員会での議論を発展させて行く必要があると思います。そういうところで少しでもお役に立てればと思っています。

これだけの構成員のポテンシャルというのはすごくて、これをどう生かすか。ちょっと反れてしまいますけれども、医学部もやはり大きな組織で、病院も予算規模が350億ですが、ある病院の先生にお聞きすると、まだまだ経営というのができていなくて、そこをもっと活用すればもっとお金を稼ぐことができるだろうと伺いました。医学部は特別ですが、工学研究科も自分たちでやっていける力があるので、それをどう発揮していくか、この役員会が鍵を握っていると言えます。

司会 有難うございます。非常に重要な視点で参考になります。以前、確か片岡先生でしたでしょうか、大学の財布というのは1つしかなくて、基金にしても工学研究科で独自に持つてはいけないんだと伺ったように思います。そういうものが将来見直しとかされるとよろしいかと思えますけれども、如何でしょうか？

尾崎 基金もそうですし、例えば大学もお金の長期運用をしています。数10億円くらいのお金を元手にいわゆる財テクをやっています。長期運用は10~20年単位なのですが、短期運用は、「何日から何日までここで運用して、次に何日から何日までどこで運用して」という細かいやり繰りをして、何百万とかいうお金を稼いでいます。やはり医学部と工学研究科の先生方が取ってこられたお金が原資になっているので、それを部局でやるのがいいのかどうかはまた別問題なのですが、そういうところでも工学研究科は非常に貢献していると思います。

司会 普段から貢献している割には、あまり処遇がよろしくないですね(笑)。そういうところもいずれ見直していただけるようになればと思います。

尾崎 はい。

司会 次に総務室の関連で、渡部先生、よろしいでしょうか。

渡部 総務室長を仰せついております渡部です。私は、去年の平成26年度からの執行部メンバーとなります。ちょうど掛下先生の任期の最後の方で執行部に加わったということです。神戸先生の後を引き継いで総務室を担当していますが、おそらく珍しいパターンだと思うんです。それは、私が総務室員でもなく、また他の室員でもなかったんですけれども、いきなり総務室、それも当時評議員でお忙しかった神戸先生の後で総務室をやりなさいということで、びっくりして、「はい」と言うしかあのときはなかったんです。総務室の管轄は、人事、労務、福利厚生、それから技術部ですね。新しく体制をつくりつつある技術部と役員会との間をうまくつなぐというのがお役目ということになります。

先ほどの尾崎先生のお話でもありましたが、まず大学で一番大きな問題は、お金と人事の問題です。最初に掛下先生にこういうふうに諭されたんです。田中先生も同じお考えだと思うんですけれども、まず、運営企画に関して濫谷先生が未来を設計するようにと。総務室は人事という観点で今をしっかりと間違いなく乗り切るようにというご指示でした。つまり、今をしっかりと見てくださいと掛下先生に言われたのを今思い出しています。

そのときはなかなかすべて分からなかったんですけれども、やはり人事というのは、よこしまな心があっては絶対後々よろしくない。それと、私、大阪大学の定年までまだ14年…15年ありますので、今ここで公明正大に務めを果たさなければ、たぶん後々自分に返ってくるんだろうなと思って(笑)。そういうことを含め、将来を見据えて、しっかりと人事関係のもろもろを間違いがないように見るべし、というふうな使命かなと思っています。

工学研究科は今、濫谷先生のお話にあったように、留保ポスト返還ということで大変な時期です。かつ、いろいろな専攻またはコースの中で人事管理は非常に大きな問題ですので、これにはかなり神経をすり減らして、間違いがないようにということと、公明正大であるべしというのを常に心掛けて、役員業務に取り組んでいます。

もう1つは、例えば組合との交渉に関しても、定期的に組合と研究科長との話し合いを持ちま



渡部 平司 先生

すが、その議事要旨がすべて食堂の前に掲示されているんです。今まで役員になるまでは、また組合の担当になるまでは、そういうものになかなか目が届かず、私自身の意識が低かったので、見ていなかったんですけども、改めて生協の前を通ると、きっちりそれが書かれているというので、いよいよ襟を正さないといけないなということと、いろんな意味で皆さんの福利厚生、人事関係に注意を払う必要があることを改めて感じています。

それから技術部に関しても、これから如何にあるべきかということを考えないといけないので、田中先生の方針に従って、工学研究科の中で、これから変わりつつある技術部をうまい形で工学研究科にフィットするものにしないといけないというのを、いよいよ責任を感じています。

ということで、役員となって一年半、2年弱ですけども、今を正確に把握して、確実に留保ポストの返還、各専攻の定員をしっかり守るとことや、これから14年後に後ろ指を指されないようにという意味で、公明正大であることを心掛けてきたんですけども、役員も今年で2年目ですので、少し攻めも考えないといけないのかなと思います。まずは、田中先生にもいろいろとご指導いただいて、今をしっかりとお目付けし、かつ本学全体の人事施策を見ながら、工学研究科として、今を守るだけではなくて、攻めの人事も澁谷先生と連携しながらやっていかないと、これから工学研究科の中で人事ポストを取ってこれないと思います。また、できるだけいろいろな文科省のプログラム等を活用して若い人をエンカレッジしたいと思います。

司会 ぜひともよろしく願いいたします。明るい情報がなかなかなくて、非常に重たい話ばかりですが、澤木先生、よろしいですか。

澤木 はい。キャンパス施設マネジメント室長の澤木です。以前はキャンパス施設マネジメント委員会でしたけれども、室に格上げをしていただきました。これは田中研究科長のキャンパス整備にかける思いの強さの現れで、こちらも重い責任を感じているところです。先ほどから皆さんの話に出ているような非常にポテンシャルの大きな工学研究科を、そのポテンシャルが発現していくような容れものといえますか、環境整備をしていくというのが、この室の仕事と思っています。

今一番大きな仕事は、ずっと続けてきている建物の改修です。その中でも耐震改修が大きな位置づけであり、終盤に入ってきています。

そのほか、室の仕事としては、耐震改修の対象にならな

いような建物の小規模な改修といえますか、老朽化している建物が多いので老朽化対策です。これは全学のほうにお金を一旦留保して、そこで仕分けがされて工事をしているんですけども、そういったものの研究科内の順位付けをする作業をしています。

それから、省エネですね。電気料金がかなり高くなっていますので、財政も圧迫する要素になっていて、省エネをどうしていくかという辺りも担当しています。

それと、このごろあまり大きな問題は起きていませんけれども、交通安全も扱っています。交通マナーでは、昔は、入構校証を偽造した学生に対し、処分を考えるといった仕事も多かったんですけども、このごろは少なくなりました。駐車駐輪についてはルールづくりを進めてきていて、工学研究科は駐車場が足りているとは言えませんけれども、各専攻で合意した配分台数やルールを守っていただいで運用しています。駐輪の方はまだ問題を抱えています。

私は4年前から施設マネジメントを担当させていただいていますが、そのころから見ると、M1棟とか、新しくM3棟ができたり、昨年の9月にはS1棟も耐震改修が終わり、ずいぶん進展しました。

ほかに変わったところは、同窓生の皆さんには工学研究科のイメージとして強く印象に残っておられると思いますが、コンクリートの回廊ですね。これが知らぬ間になくなっていると思います。これも耐震性の問題で危険があるということで撤去をしました。同窓生の皆さんが数年ぶりにキャンパスに来られると、建物の表情というかわファサードもだいぶ変わっておりますし、回廊がないということでもずいぶん変わったという感想を持たれるんじゃないかと思っています。



澤木 昌典 先生

私は環境工学出身なので、S4棟という建物で学んでいたんですけども、それもこの4月になくなりました。同窓生からもだいぶさみしがられていますけれども、工学研究科キャンパスはそういった形の変化を遂げています。

耐震改修は、本当は文科省の当初の予定では、平成27年度中に学校関係の耐震改修が終わっているはずだったので、工学研究科も終わっていないといけませんけれども、まだ、AR棟とP2棟という大きな建物が残っていて、概算要求を続けています。順調にいてもあと2～3年は耐震改修にかかるのかなと。その間、共通経費から仮移転の費用などいろいろと支出いただいでいるので、

もう少しご迷惑をお掛けするということになるのかなと思います。今年度、耐震改修で工事が始まるのが、工業会からも1億円の寄付をいただきました、吹田福利会館との耐震改修と改築です。食堂などが入っている建物です。これは今まさに業者選定の大詰め段階でして、もうすぐ契約が結ばれ、工事が始まるころです。この記事はいつ出るのでしょうか。

田中(敏宏) 4月です。

澤木 4月ですか。4月ですと、かなり工事が進展しているはずですね。食堂の席数も増やしますし、いろいろ雰囲気が変わると、今の食堂の奥の所に5階建ての建物を新築させていただく。その1階と2階は、食堂とか生協の書籍やサービスカウンターが入るんですけども、4階5階部分は、オープンラボという形で、田中(敏嗣)先生がやっておられるような産学連携の共同研究講座だとか共同研究所だとか、そういうところに入居いただくような形を予定しています。

残る3階に、今、概算要求では仮称ですけども「教育研究社会連携commons」ですか、ちょっと長い名前ですが、サロンをつくらうとしています。そこに工業会の事務所を中之島センターから移転していただいて、工業会としてはたぶん念願だと思っているんですけども、いよいよ工学部のキャンパスの中に事務所を構えられるという形になります。竣工は平成29年4月の予定ですけども、これができるのと、新しい建物の3階部分に、ソファやらテーブルやら、あと、個室的にいろんな会合ができるような場所などを設置するのですが、在校生、教職員、同窓生の人たちが気軽に交流できるような場ができるということで、おそらく工業会のほうでもいろんな企画を検討されていくと思いますが、縦のつながり、あるいは縦横の交流が活発になるような場が、新しくキャンパスの真ん中にできるので楽しみにしているところです。

耐震改修が終わっていきますと、ずっと以前から「やろう、やろう」と言っているんですけども、建物周りですね、オープンスペースをもっときれいに整備していこうということで、室になる前身の委員会でのプランをつくっているんですけども、年間1,000万円くらいの予算で5年間かけるとかなりきれいになると考えています。

キャンパス環境が変わっていきますと、学生のほうもキャンパスに愛着をより強く持ってくれるんじゃないかという期待があるんですけども、去年くらいから GECS (ゲックス) という環境サークルがあるんですが、この一部の学生たちが工学研究科のキャンパスの中に花を育てるような活動を

プランターを用いてやっています。花咲兄さんという名前の活動で名のおとり、男子学生中心でやっているんだと思います。見てみると、女子学生もやっていますけれども。プランターに花を植え、水やりをしてくれています。今年も、高層棟のすぐ南東側の斜面に春に咲く花を植えようということで、今から活動が始まるころのようです。そういう学生の意欲をどんどん伸ばすように、少しサポートしながら、よりいいキャンパスをみんなで作っていったらなと思ったりしているところです。

司会 有難うございます。では、青木先生、コンプライアンス室の活動についてお話し願います。

青木 はい。

青木 田中研究科長が新しくコンプライアンス室を立ち上げられ、8月に私に室長になるようにとのお電話をいただいたのですが、正直驚きました。というのは、これは私に最も向いていない役目じゃないかなと思ったんです。なぜかという、私は右肩上がりの良き時代に土木分野で育った者ですが、当時の土木業界というのは、実態はともかくイメージとしてはコンプライアンスの対局にあったと言えるからです(笑)。先日友人に「今、大学のコンプライアンス担当やっているんだ」と言うと、「いや、土木がコンプライアンスはないでしょう」と言われました。そんなわけで、適任ではないなと思ったんですけども、最近、少し本を読んでコンプライアンスの勉強をしてみると、コンプライアンスというのは、法令遵守と訳されていますけれども、その本質は組織のリスク管理なんですね。私の専門の1つは沿岸防災ですが、防災は社会のリスク管理ですので、そういう意味では関係なくはないわけです。大震災後に防災の考え方が大きく変わったように、隙なく何でもガチガチに縛るというよりは、様々なリスクがあることを前提に、大学のリスク管理として本質的にどういふことが必要なのかということを考えていきたいと思っています。

とは言っても、今やっていることは法令遵守の徹底についてです。先日も不正経理関係の講習を2回やったんですけども、講師ということで一生懸命ガイドラインなどを読みました。文科省の締め付けが厳しくなって、それはいろんな不正が原因でそうなっているんですけども、それに対して大学が今までやらなくてもよかったようなことをやらなければならないという状況になっています。研究不正に関しても、STAP細胞の件以来かなり厳しくなっていて、研究データを残すとか、研究倫理教育を徹底するとか、これも

当たり前のことを強制してやらせている感じなんですけれども、組織のリスク管理という意味ではやはり必要なのかな、という気がしています。

昔の良き時代を過ごした我々にとっては、なぜそんなことをやらなければならない社会になってしまったんだろうと思ってしまいますね。JABEEなんかでもそうなんですけれども、非常に面倒くさいことをやらされているんですが、おそらく色々な面でグローバル化しているというところが、そもそも根源なのかなという気がしています。もともと日本人の社会は、性善説的な考え方なので、普通の人は悪いことはしないという立場で物事を見ているんですけれども、世界の国々の多くは、性悪説に基づいているので、放っておけば何か悪いことが起こる、それをちゃんと組織が管理しろということなので、おそらく大学もグローバル化していく過程でそういう組織管理が求められたり、教育の質の保証が求められたりしているんだろうと思います。そういう意味では、コンプライアンスを推進することも、大学がグローバル化するための産みの苦しみというふうにとらえられるのではないかと思います。その意味では、今後グローバルに活躍する学生を育てるための教育の一環として研究倫理教育を捉えることもできます。コンプライアンスというのは、堅苦しい、あまり進んでやりたくないことではあるんですけれども、あえてそのポジティブな面を見ていくと、やる意味があるような気がしてきます。

コンプライアンスには、経理や研究における不正以外にもハラスメントの問題とか、いろいろな事案が含まれるようなんですが、まだ始まったばかりで、私自身よく分かっていない点が多くあり、これからいろいろ考えながらやっていきたいと思っています。事務の方はしっかりやっていただいて、一教員としては、そこまでやるのかという気持ちが強いですけれども、コンプライアンス室としては、管理側と教育研究の現場との間に入って潤滑油的な役割も果たしていければいいかなと思います。まだどんなことをやるのかよく分かってはおりませんが、そういう気持ちでいます。



青木 伸一 先生

司会 どうもありがとうございます。非常に興味深い切り口であったのではないかと思います。そこで、まず社会連携は盤石と。着実な取り組みという意味で、青木先生や澤木先生に伺ったようなお話があったと思います。一方、尾崎先生が言及された工学研究科の独自性とか、或いは渡部

先生の攻めの人事の話を含めて、少し未来を描くような、あまり…何て言いますか、深謀遠慮は報われないというのが私の大学に来てからの経験ですので、あまり先を見ると転んでしまいますので、むちゃでないといえますか、現在の境界条件のもとでいったいどんなことが出来そうなのかなということを少し先生方にご意見いただければと思います。

田中(敏宏) 今お話していただいた内容はすべて、先ほど私が言いましたように長期的な人材育成に必要な基盤として大切です。ここに来ていただいている室の先生方は、それを全部支えるような役割を担っておられます。

ただし、今から神戸先生にお話していただいたらいいかなと思っていますが、研究活動だけはあえて室体制の中に入っていない。それは実際には研究活動を支えるような室というのがあってもいいかなと思うんですけれども、室ということになると、色々な規約などの制約がその活動に対してできますので、教員の研究活動に対する自由度を妨げる可能性もあるため、室体制のなかに組み込んでいません。研究活動というのは、もっと夢や自由度がある話です。特に、工学研究科の先生はポテンシャルが非常に高く、特に若い准教授とか助教の人もおおいに、武者修行みたいにしてどんどんやってもらったらいいかなと思っています。教育は工学研究科としてある程度枠組みを設定しますが、研究活動についてはむしろ土台だけ差し上げて、ここにいる先生方含めて、自由にやってもらいたいと思っています。そういう意味で、戦略支援部がそのような土台作りを進めてほしいと思っています。

神戸 戦略支援部というのは、2年半前に立ち上げられて私が担当させていただいていますが、今、何名かの先生方がおっしゃったように大阪大学のそれぞれの研究者は、非常にレベルが高くて、必要な研究費をご自身で獲得され研究を実際されています。ただ、各ご自分の専門分野で研究が完結している場合がかなり多いですね。それぞれの分野でももちろんトップの研究をされているんですけれども、イノベーションはやはり1つの分野だけではなかなか達成できないということがあると思います。特に大阪は、東京と離れているので、国策とか国の方向とか、新しい技術とか、国がどちらの方向へ誘導したいのか、そういう情報がなかなか取りにくい。もちろん、プログラムが策定されてオープンになってからでも、それぞれ皆さん実力あるのでそこに参画されるのですけれども、できることなら、そういう話が始まっているところと一緒にプログラムをつくれるような状況になれば、先生方がそれぞれの学問分野で現在活躍され

る以上に、国のため、産業全体のためにもっと貢献していただけるはずで。よって、いろんな将来構想も含めて、情報をもっと阪大の中に取り込みたいと思います。また、計画段階から国策できる道筋ができれば望ましいと思います。

それから、工学部は、ものすごく広い分野をカバーしています。原子単位で研究されている分子工学とか化学、それから微生物や細胞を対象とする生物、さらに機械、材料や社会基盤関連の非常に大きなところ、それから、もっと世界的な環境とかエネルギーまで、ものすごく分野が広いので、それぞれの分野の中での研究以外に、分野を超えて融合することによって何かもっと大きなシステムや計画、プログラムができたらいいなと思います。その結果、阪大発の大きなプロジェクトを動かすことができるのが最終的なゴールと思います。そういうところを目指しながら、まず、工学部の中でいろいろな情報を集められるような部署として戦略支援部がお役に立てればと思います。

もちろん大学本部であっても構わないんですけども、組織が大きいと、それぞれの研究者の顔まで見えないんですよ。工学部くらいになると、どういう人がどういうところにいるというのは何となく分かるぎりぎりのサイズかと思います。それから、分野的には自然科学という一つのくくりとしてまとまっていますので、工学部の中でそういう部署があってもいいと思います。

今、それぞれの先生方の研究内容をファイリングを進め、そういうデータがかなり集まってきています。すなわち、何かのニーズがあったときに、工学部にこんな方がいますよと答えられる状況を今整えつつあります。

それと、今大学は、大きな変革が求められています。大学のオリジンとはどこだと言われると非常に難しいのですが、教育機関としては、紀元前から僧侶たちが寺院などで教育をしていたそうですし、人の集まりとしては、中世に人が集まって、ギルドのような集団から、その中で教える人、それから学生が集まって来たそうです。そこでは例えば神学や医学、法律などを教えていたし、専門教育もやっていた。これが一つの中世の大学のあり方だと思うし、アメリカでは最初にできたハーバードで、宣教師の養成を含めた教育がされていたそうです。

時代や場所によってそれぞれニーズが変わってくると思います。現在の大学が世の中にどう貢献できるかと言う観点からみると、やはり新しいあり方、特に日本が遅れているあり方の1



神戸 宣明 先生

つは、もっと世の中に開かれた大学になる事と思います。いろんな人が師を求めて、仲間を求めて、真実を求めて大学に集まってくる、そういう人が集まる場になることが理想の一つだと思います。

それはいろんなニーズがあると思います。学生だと、そこで学びたいと思っから人が集まってくるでしょうし、企業の方だと新しい技術を求めて集まる。さらに、夢を共有する仲間と一緒に何かを開発するとか、違う分野の情報がほしいとか、そういういろんな方々が集まってくれる組織になっていくのがやはり必要という気がします。

社会連携室の支援により、例えば共同研究でいろいろな成果が生まれると思いますが、それは知財としてきっちり企業で使っていただけたらいいと思います。その次の段階として、これは社会連携室ともやりとりしながら進めないといけないと思いますが、例えば10年後20年後の技術や、将来の世の中のありようなど、社会連携室の中に企業さんがいらっしゃるので、そういう人たちに集まっていただいて議論して頂く場を提供する事も重要と思います。即ち、それぞれの企業の方が新しい目標に向かって何ができるか、何が大事かという議論を通して、大学がオープンイノベーションの核になる。例えば、企業の方に集まって頂き、そこで議論しながら、次の将来技術の方向付けをすることは、十分イノベーションにつながると思います。即ち、いろんな人が大学に自ら望んで集まって来てもらえるようなシステムを構築することが大事だと思います。戦略支援部はそういうオープンイノベーションの核となる組織を目指して、活動したいなと思います。

司会 できるだけ形に見えてくるとよろしいですね。

神戸 そうですね。なかなか難しいとは思いますが、現実にはアメリカでは、大学の周りにベンチャー企業がいっぱい寄ってくるわけですよ。やはりニーズがあるから集まってくるわけなので、日本でもそういう状況ができるのではないかと思います。ただ、向こうは国が広いので、近くに来ないと不便ですけども、日本は狭いし、土地が高いので、状況は違いますがもっと人の交流を活発にできれば日本の活性化につながると思います。

司会 魅力を発信するということですよ。

神戸 そうですね。それから、例えばベンチャーを立ち上げたいというときには場所が必要なわけですよ。それを例えば工学部の中でどこか、「じゃあ、ここ使わせてください」と

か、「こんな装置がありますよ」という感じで、フリーに出入りしてもらような場所ができると、もっと簡単にベンチャーも立ち上げられるようになる。いろんなフェーズがあると思いますが、大学のバリアを低くしていろんなニーズを持った人に気軽に大学へ来て頂き、「あそこへ行ったら何とかなる」、そういう感覚を持って頂けるようになれば理想かなと思います。

司会 「特徴のある大学を」という言葉もございますので、何らかの形で核となる役割が果たせれば良いなと思います。

田中（敏宏） ここまでが構成役員の先生方による全体的な話になると思います。大学って何かなと考えたときに、絞り込んでいくと、やはり人材育成というのは絶対欠かせないと思っています。もう1つ、価値の創造というのも大学のミッションだと思います。だけど、一個に絞るなら、どちらを取るかといったら、結局、人材育成の環境の中で育った人が価値を創造すれば良いということなので、人材の育成というのは、何を取っても最後にはそこが残っていると思っています。研究活動については、ポテンシャルの高い人が沢山おられるので、むしろ自由にしてもらって、人材育成のほうはむしろケアしながらやっていく、そういうような全体の構成・環境づくりができればいいかなと思っています。

実は、昨年7月にカリフォルニア大学の公衆衛生の先生が講演に来られました。題目はウエルネス。私は、ウエルネスというと、サプリメントのような健康食品か、メンタルヘルスカ何かと思ったのですが、ウエルネスの定義は、健全な活動ができるかどうか、我々だったら、研究活動あるいは人材育成が健全にできるかどうかという環境づくりの話でした。さらにその要素が8つあるというんです。その中には、もちろん健康、精神面もあるんですけど、ファイナンスも入っている。それから社会連携、さらにはキャンパスのような実際の活動の場の維持発展などの要素が含まれています。

そういうものが8つあって、健全な活動を支える因子が8つあるという話です。実はこの8つの因子が工学研究科の執行部でいうと、先ほど来話のしている8つの室に相当します。

そのため、大阪大学工学研究科にとってウエルネスをきちっと保つには、この8つの室が必要であって、その上に人材育成と価値の創造を行う場ができていて、価値の創造というのは研究活動に相当し、人材育成のほうはみんなケアして、執行部が支えていく。それが今の工学研究科の全体の成り立ちというか我々の役目として取り組むべきと



ころだと思っています。

実際のプレイヤーの人は別にこういうことを意識せずに教育研究活動に打ち込めて、我々が場を提供するという形になったらいいかなと思います。

だから、長期的な人材育成のために、我々はそれを支えるための土台を作ることをミッションとし、それぞれの室はウエルネスの8つのパートになっていて、全体がまとまったら良いと思っています。

司会 できれば、その「ウエルネス」という言葉の中でコーディネートされた形のもので、未来を描くことができると良いと思いますが、私などは食べ物を夕方にたくさん貰えるより、今すこし欲しいとか思ってしまいますので、その種みたいなものを何処かで皆に示すことが出来ればと云う風に思います。組織も大きいですし、その中で「何か変わるかもしれない」、「何かやるとまくいっくかもしれない」と先生方に思っただけのような、神戸先生がおっしゃったような組織でも仕組みでも何でも構わないのですが、そう言ったものが先生方のほうから発信できると素晴らしいと思いました。

田中（敏宏） やはり強みをもっと生かしていったら良いと思うんですけども、田中（敏嗣）先生がご担当の産学連携が1つの特徴だし、産学連携については工学研究科がかなり支えていると思います。そういう強みのあるところが教育活動も引っ張っていったらよいと思いますし、研究活動もますます発展したらいいし、国際交流なんかもどんどん伸ばしていき、阪大工学研究科のメリハリのある特徴を魅力に感じる方々が集まってさらに魅力ある工学研究科になればよいと思っています。

司会 予定の時間を大幅に過ぎておりますが、何かこの場で追加してお話し頂くことはありませんでしょうか。いいお話をたくさん…お聞かせ頂いたかと思っておりますけれども。



田中(敏宏) 本当はもっと夢のある具体的な話があったらいいんですけど、今回お話をさせていただいた土台を基に明るい話題を大いに語る工学研究科の環境づくりに務めたいと思います。



司会 明るい話を期待しております。では、以上とさせていただきます。先生方どうもありがとうございました。